



春日小だより

令和6年10月31日
練馬区立春日小学校
校長 後藤 京子
学校通信 11月号

もう一人の自分と出会うために

副校長 市村 大

私は大学で歴史を学んだのですが、入学してすぐの頃、「日本史概論」という講義がありました。大学で受ける講義はどんなものなのか非常に興味がありましたが、この授業の冒頭の話は、私に衝撃を与えました。教授がいきなりこう質問してきたのです。「日本史の始まりはいつですか。」…一瞬頭が混乱しました。よく言われるのが旧石器時代から縄文時代。しかし、この前から人は住んでいたわけで、そこから考えるのなら日本列島が形成された時なのか。いや、そもそも「国」の意識がなかったのなら国家が成立した時と考えるのか。「国」といっても、「日本」という言葉が登場する前を「日本史」と呼んでよいのか…。どう考えても、なかなか納得する答えにたどり着きません。

この問いを聞くまで、日本史の流れは漠然と年表通りに考えていました。しかし、その思考を大学の教授は、たった1つの問いで破壊したのです。講義を受けるにあたり、教授が伝えたかったのは、高校までの日本史とこれから学ぶことは別物だということ、固定の考えに縛られると新しいものが見えてこないこと、だったのです。

人間はどうしても、固定の考えに縛られることがあります。そのおかげでコミュニティが成り立つこともありますが、それが強すぎると、他の発想に至らなかつたり、それ以外の考えを否定したりすることも起きます。それを防ぐためには、常に、自分の中にもう一人の自分を置いて、「その考えは本当に正しいのか」「自分の考えは他者から見たときにどう映るのか」と自問自答する必要があります。しかし、「言うは易く行うは難し」で、それでもなお、その狭い世界から脱却できないことが多いです。

残念ながら最近は、自分の考えに固執して、他者の考えを頭ごなしに否定する傾向が強まっています。「それはあなたの感想ですよ」がブームみたいになりましたが、使い方を間違えれば孤立、関係の断絶を生みます。それが自分にどれだけ悪影響を及ぼすのかを理解していないところがまた怖いのです。そして、大人もそれに陥っているところも…。

自分の世界を広げるためには、違う世界に触れることが何よりも大切だと考えます。違う世界に触れるとは、他者とのかかわりもそうだし、読書などもそうです。あえて自分の好みとは違う世界に触れることも大切です。自分にはなかった考えに触れ、それを否定するのではなく、なぜそういう考えに至るのかを考える。それが納得できるかどうかは別として、思考の過程をたどることは、自分の世界を広げることに繋がります。

今月の15・16日に行われる学芸会は、自分の世界を広げる最高のチャンスです。役になりきることで、いつもとは違った世界が見えてきます。恥ずかしいと思う気持ちを押し込め、もう一人の自分に出会いに行きましょう。期待しています。